

富士山の女神

コノハナサクヤヒメ：浅間神の別の姿

上に示されているのは、吉田と川口の御師たちが富士講信者に配ったお守りです。この種のお守りは御法印、あるいは牛王と呼ばれます。1788 年に作られたこの牛王には、富士山の上空にいる阿弥陀如来とその眷属が描かれています。1860 年の牛王では、神道の女神が阿弥陀如来に代わっています。

富士山における神道の女神を強調するこの変化は、1868 年に政府が発した神仏分離令よりずっと前に起こりました。富士山の神と神道の神であるコノハナサクヤヒメが同一視されるようになったのは 17 世紀初期のことでした 19 世紀までには、忍草浅間神社に祀られていた像のような古い像までもがコノハナサクヤヒメを表したものと見なされていました。1868 年の政令は、この新たな状態の定着を促しました。やがて、富士山の神（および国内各地のセンゲン神社、アサマ神社で祀られていた神）は、ほぼ共通してコノハナサクヤヒメと同一の神とされるようになりました。この信仰は下に示されているような彫刻や版画の作品として表現されました。今日に至るまで、このような図像は最もなじみ深い富士山の神の描写であり続けています。